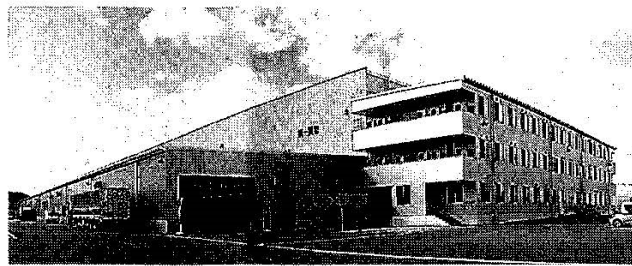


2023年6月20日掲載 輸送経済新聞

第一貨物「山形支店」

3店所統合で効率化 人、設備、情報共有し

東北中央自動車道山形中央インターチェンジの東側、約1分の距離に第一貨物（本社・山形市、米田総一郎社長）の山形支店がある。旧・山形支店を含む3店所を移転・統合して新設。2021

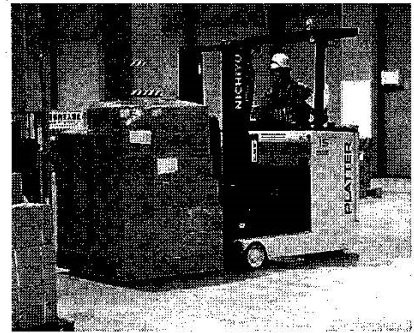


ホームは運行、集配共に全天候型。2階の一時保管庫と一体的に運用している

年10月、営業開始した。所在地は山形市黄金45ノ1。開けた場所に敷地約4万平方メートルを確保し、鉄骨造の3階建て物流棟と3階建て管理棟合わせて延べ床面積約2万5000平方メートルの施設を構えた。トラックは全事業で計168台を保有。日々、特

作業・品質面では、1階約3700平方メートルの荷さばき場をインドラ構造とし、ホーム北面の運行側、南面の集配側共に風雨の影響を受けずに作業が行える。2階には約8000平方メートルの一時保管庫があり、菓子メーカーの商材を扱うエリアは20

積みでは16便が出発、集配48便が稼働し、1日当たり発着トン数は期中平均で到着2300、送1900、20ト。ドライバー、ホーム作業を行う作業職、倉庫作業に携わるロジオペ職、事務・管理職計188が勤務する。



2階で使用するフォークリフトは後退時に青色ライトで進行方向地面を照らし、周囲に知らせる

度前後の定温庫。貨物用エレベーター、垂直搬送機各2基を備え、上下階の移動もスムーズ。菓子メーカーの商材の入出庫のため、西面には専用パースを設けた。施設開設の狙いは、老朽化施設の更新と市内3

積み、ロジスティクス、区域の事業所移転や楽器輸送など何でもできる店になった」と遠藤誠取締役山形支社長。統合から1年半以上が経過し、人、設備、情報の共有による効率化では一定の成果を得た。

働く環境変化 一体化を進め

店所統合による効率化。1964年開設の旧・山形支店は、21年当時で築57年が経過。業務拡大の過程で施設拡張が困難だったため、発着は旧・山形支店、到着は山形流通ターミナルに分散したといい、警備輸送など特殊業務を担う区域センターも同じ市内にあった。「3店所統合により、特

同時にこの間、気を配ってきたのが「統合効果を引き出すための」業務管理だった」と奥寺淳山形支店長。統合以前は異なる店々異なる業務に従事していた従業員が1日同じ場所で働き、食事や休憩もスペースを共に

する。特に事務職や作業職では、長年発着だけに携わってきた人が到着もこなす。逆もろかりで、各人の意識を変えるところから、仕事のペース配分、ルール統一まで、一つ一つ職場環境の変化への対応を進めてきた。「また道半ば。一層の改善の余地はある」（遠藤取締役）。また、今後は「保有設備の最適な規模を見極めていく必要もある」（奥寺支店長）。そして、今期最大のテーマは業務拡大と適正運賃収受だ。昨秋以降の荷動き悪化の一方、コスト上昇に対応しつつ「投資効果を最大限発揮するためにも、実の取引件数を増やし、収支改善することが必要。1カ月でも早く成し遂げたい」（遠藤取締役）。到着・発着の情報共有、集配ドライバーが持ち帰る情報や、顧客からの相談・問い合わせ内容を記した「情報カード」も活用しながら、1件でも多く商機をつかみ取る。（矢田 健一郎）